



(発行 偶数月)  
発行：宮崎市教育委員会文化財課  
宮崎市きよたけ歴史館  
発行責任者 川口 眞弘  
所在地：宮崎市清武町加納甲3378-1  
TEL 0985-84-0234 FAX 0985-84-2634  
E-mail kiyorekisi-u@city.miyazaki.miyazaki.jp

## ～ 没後140年 ～

### 東京都文京区千駄木養源寺 安井息軒墓碑の秘密

幕末から明治にかけての知の巨人、安井息軒は明治9年9月23日、江戸は土手三番町の大広間で、長女の須磨子や弟子たちに看取られながら、78歳の長寿を全うしました。

遺体は千駄木の養源寺に葬られました。右がその墓碑で、左が館長です。いかに大きく立派な墓碑かお分かりだと思います。



この墓碑は実は当時の一流が凝縮された墓碑なのです。まずは是非とも息軒の墓碑に使って欲しいと中国から碑銘を書いて送ってきたのは、中国(清)の高官、応宝時(おうほうじ)です。そして息軒の病状を心配して毎日たくさん弟子が訪れますが、その中から息軒は、安井家の今後のことは谷干城に、墓碑の碑文は著名な文筆家であった川田剛(かわだごう)に、書はこれまた当時有数の書家であった日下部東作(くさかべとうさく)に委ねたのです。

## 偉人にふれる・学ぶ・まねぶ



梅ちぎり 左：子育て支援センター 右：清武幼稚園

安井息軒は宮崎が生んだ最も素晴らしい偉人の一人です。しかしながら息軒の学問や偉業は高尚で分かりにくいと言われます。高尚であればあるほど、まずは幼少の頃から本館や旧宅を訪れ、遊びや体験を通して間接的に“ふれあい”を重ね、まず偉人に親しみをもつことが大切です。

さらには小学生から大学生、成人に至るまで繰り返し、そして少しずつ学びを深めていくことが肝要です。本館では学校用の教材を提供したり、講座を開設したりして、息軒の人と偉業への“学び”が深まり、その素晴らしさを“まね”び、生かしていけるよう尽力をしています。(文責：川口)



清武小6年 見学



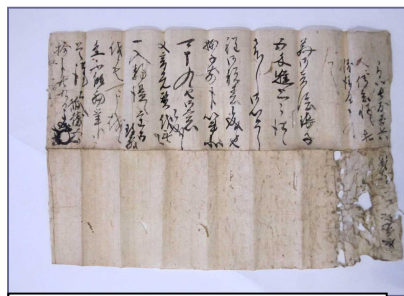
国際大学による移動講座

## 収蔵の逸品シリーズ(1)

### 稲津掃部助の書状

本館には、清武地頭 稲津掃部助(いなづかものすけ 1574-1602)の書状として伝わる古文書1通が収蔵されています。元は日南市飢肥にある長久寺の所蔵で、一昨年の3月に刊行された『清武町史 資料編1 通史関係資料』にも紹介されています。

稲津掃部助は、25歳で清武地頭を命じられ、慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いの際に、高橋氏の家臣権藤種盛が守る宮崎城を陥落させ、西軍に属した大名の諸城に向けて兵を差し向けた人物です(後には、味方の城＝宮崎城を陥落させた責任を負わされて29歳の若さで自害)。



稲津掃部助の書状(本館所蔵)

長久寺は、江戸時代に飢肥城下今町にあった天台宗寺院です。初代藩主伊東祐兵が本庄(現国富町)長久寺の住持金剛院の弟子泉学院(せんがくいん)を招き、

同名の寺院を飢肥に創建し、飢肥・清武地方の座頭(盲僧)総家督としたのが始まりといわれています。泉学院は、天正15年(1587)に祐兵が羽柴秀長を先導した際、通行自由な盲僧の立場を利用し、「清武真福寺」住持庭庵とともに、琵琶に米を隠して兵糧を運んだとも伝えられています。書状の宛名「泉岳坊」は、この初代住持泉学院のことでしょう。

書状の署名は「稲勝五郎」で、稲津の「津」が省略されています。「勝五郎」は幼名で、『日向記』に、25歳の時に「掃部助」に改名したとあることから、書状はそれ以前に記されたものと考えられます。

書状の内容は、「御眞法」の礼として銀子五両を進上する旨を記したもので、日頃より両者が親しく交流していたことが伺えます。飢肥長久寺の近くには、掃部助の伯父「定山(じょうざん)」が居た安国寺があることから、掃部助が伯父のもとを訪れる傍ら、泉学院のもとへ足を運んでいたとも想像できます。(文責：今城)

～講座等のご案内～ 申込・問合せ Tel 84-0234 本館まで  
第2回きよたけ歴史講座 (7月16日 10:00～11:45)

「広瀬転城 佐土原城のお引越し」

講師 佐土原歴史資料館学芸員 瀧川哲哉氏

第3回きよたけ歴史講座 (8月6日 10:00～11:45)

「わたしが最近知った清武関連情報」

講師 日南市教委文化財専門担当官 長友禎治氏

夏のミニ展示

「安井息軒没後140年 ～安井家寄贈の衣装コレクション」

7月16日(土)～9月4日(日)

休館日：毎週月曜、祝祭日の翌日(土日を除く)